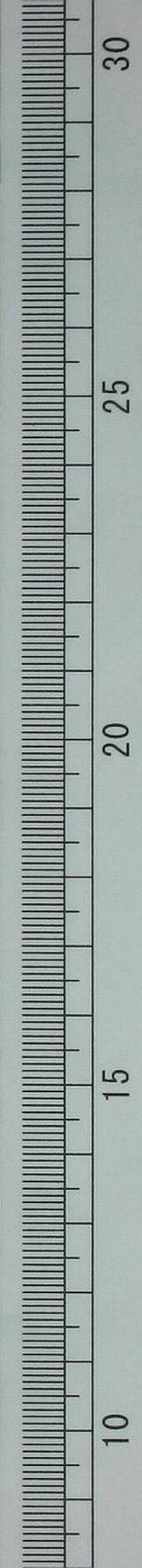


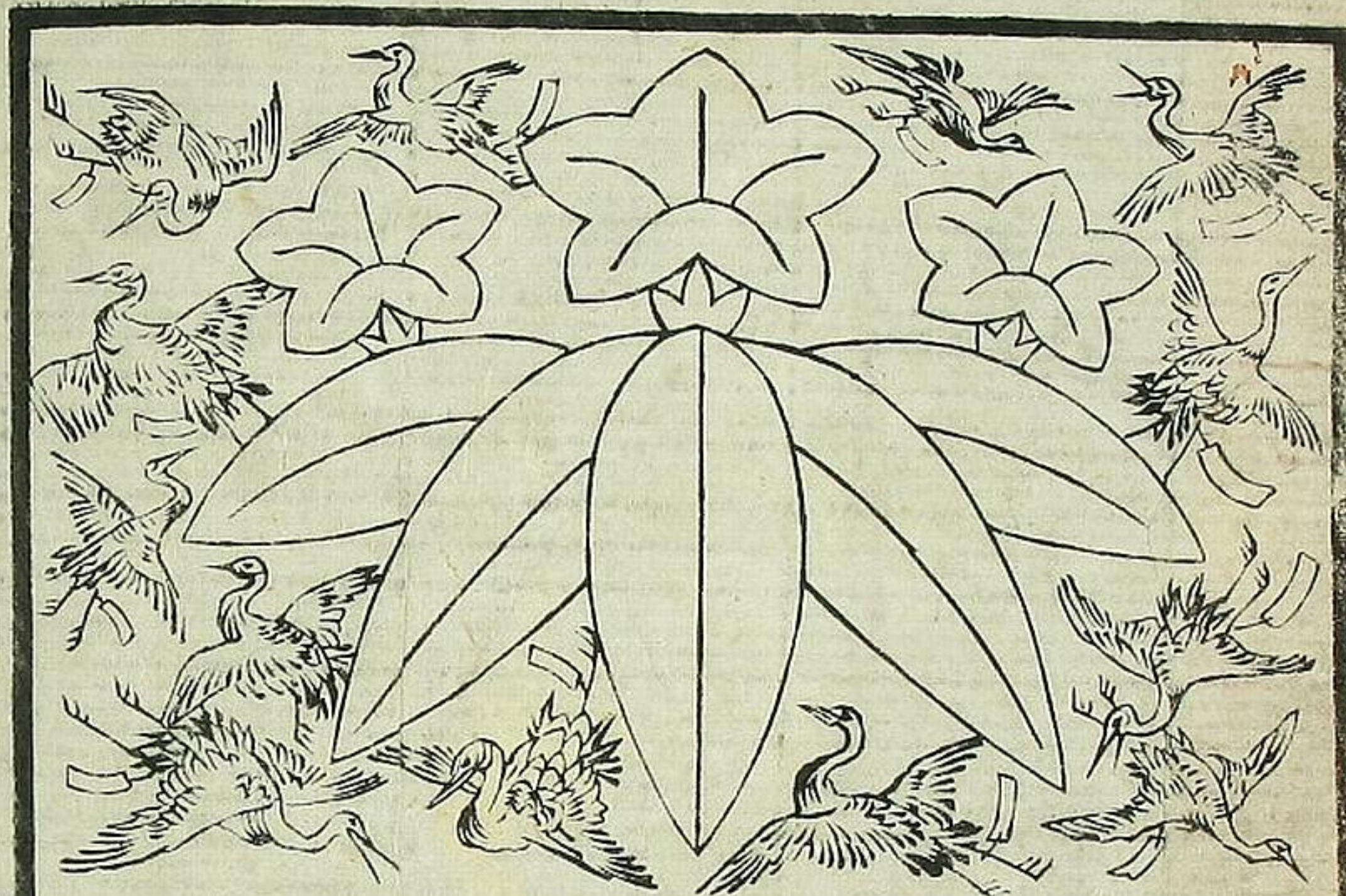
鑑金史鑑

津田文庫  
文庫 1  
1827  
1



010190617446

早稲田大学  
図書館蔵書



蒲殿八	山名十	畠山十	逸見十	武田五	南部六	曾根六	山本九	毛利三	深栖五	二柳五	村上共
判官殿八	里見十	仁木十	武田三	加美五	安田七	奈古六	平賀七	太田三	豊嶋五	成田五	井上七
阿野九	額田十	細川三	一條五	秋山六	安井七	浅利六	大内七	大河三	山田五	土方六	高梨七
新田九	足利十	荒川三	板垣五	小笠原六	河内七	佐竹九	石川三	小國三	山田五	大森六	仁科七

序

つだ文庫

向て猶念我程しつあまも世り  
 けをまき事一ろ一然きともろを姓を  
 を記し事るのまをれを見める者遺憾  
 ちあせむ事年迄世の志あまを嘆ある  
 日彼女を考き宗しそ子の世の流漏を補ふ  
 去る世の事詳ふ知る辱しめはしとをも

血んかゝるのるき 九よろ一毛我輯録を  
終極の事からむら校訂足らざるを  
ゆゑしるふとらる

京都 井維彦

文政二年甲寅

乙卯子梅年



凡例

一 藤倉殿の御家人と稱する者國々小多して故奉する事  
 難し且家々の系譜不載する者或ハ 禁裏 院中  
 候ト或ハ攝家清光小侍(或ハ徳國の官勢在廳小下  
 或ハ嫡家の郎従となりて混雜少く今其著  
 りの東鑑小名録ある瓜園東の御家人と  
 上野下野甲斐信濃の源氏或ハ三浦小山 秩父乃一族  
 唐く其名氏を異ふは嫡流の次小記を庶流を  
 諸家の系圖ハ書よ傳つる瓜以省畧して頭出  
 出きて記するハ祖先詳たうざれば也  
 一 此書頼朝卿治承四年義兵の始より兼久年中乃

兼言式監

1827-1

頃より紙輯録を因て或ハ父と奉げてふと畧せるあり或ハ父と  
 祀して父を載せざるあり或ハ父子並仕へても其の子未俸録  
 を賜つゞるもあらず一男二男も亦同く如是ハ其子の  
 系圖不譲して別姓を承出さざり  
 一前出小領知の石高を記す今是を省く往古の所領ハ  
 庄園儀子所ありて一列一郡を不殘にさるハ稀あり  
 譬ハ何の國某の庄儀傳ふのみと云々 極哀  
 院中の由儀と始して官自寺社の依託國を散在せり  
 武家亦是小同其儀の依ハ百町千町と云て千石万石と云  
 一各儀小畧傳と著すと云々も其大槩而已委々々然と  
 見てあるる

凡例終

鎌倉殿御系圖

人皇五十六代

○清和天皇

貞純親王

三品中務卿

号桃園

文武達人

經基王

正四位上 鎮守府將軍  
号六孫王

滿仲

從四位上 左馬頭  
号多田

賴信

從四位上 河内守  
鎮守府將軍

賴義

正四位下 伊豫守  
鎮守府將軍

義家

正四位上 陸奥守  
鎮守府將軍 八幡太郎

為義

從四位下 左衛門尉  
檢非違使 号六條判官

義光

從五位下 左兵衛尉  
刑部少輔 新羅三郎

義朝

從四位下 左馬頭  
贈正二位 内大臣

義平

鎌倉惡源太  
母橋本遊女

朝長

從五位下中宮進  
母波多野義通妹坊門姫

女子

平治乱為父死 歲十二  
母江口遊女

女子

一條中納言能保卿兼中  
母熱田大宮司季範女

賴朝

正二位大納言右近衛大將 幼名武王丸  
征夷大將軍 總追捕使 母上同

義門

宮内丞 早世  
母上同

希義

土佐冠者 壽永元年十二月朔日於配所生害  
母上同

範賴

從五位上參河守 蒲冠者  
母上同

女子

夜叉御前 入水死 母青墓大炊女延壽

全成

阿野法橋醍醐惡禪師 幼名今若  
母九條雜仕常盤

義圓

八條卿公圓濟 幼名乙若 養和元年三月於墨服戰死  
母上同

義經

從五位下伊豫守左衛門尉檢非違使 幼名牛若  
母上同

女子

清水冠者義高室 号大姫君  
母政子方

賴家

從二位左衛門督 征夷大將軍 左近衛中將 幼名万壽君  
母上同

貞曉

仁和寺法印 寬喜三年二月廿二日入寂  
母常陸入道妹

○寶朝

正二位右大臣左近衛大將左馬寮御監 幼名千幡君  
征夷大將軍 母政子方

一萬

為義時被弒 母比企能負女

女子

頼經卿簾中

千壽

泉小二郎親平立之反事顯戰死

公曉

鶴岡別當 阿闍梨 幼名善哉君  
建保七年正月廿七日弒寶朝公為長尾定景被誅十九歲

鎌倉殿御畧傳

征夷大將軍正二位行大納言兼右近衛大將源頼朝卿ハ贈正二位内大臣源義朝公の三男入王七十六代近衛院御宇久安三年丁卯四月八日尾張國幡屋にて誕生し御母ハ熱田の大官司季範の息女あり幼名武王丸と号し天性聰敏少て父君の鍾愛他ハ超平治元年巳卯十三歳中々首服あり從五位下右兵衛佐小叙任し是は雅多也とも其才器あるふよきなり是より佐殿と稱されし時源家重代の太刀鎧と讓らるるは兄義平朝長ありとくとも佐殿寛仁大度ありて未だ武將と成るるがごとし義朝豫知ありしはなるべし平治の乱少父兄ハ隨ひて戰場に赴き軍敗れて近江國にて父君小後也道中て賊と討ち密に東國へ下りて入娘小平家の士弥平兵衛宗清が為小虜と成死刑を行ふべしと清盛の継母

池の禪尼の情ふりて命を助けらるる伊東元平伊夏不配流すれ  
 伊東祐親預てなるされども源家再興の大志を忘れたまはる  
 常小東國の武士不親む其頃伊東少娘小通し若君一人  
 出生まを祐親都の大番流てゆり来をけ由を知て不致るさ  
 我前め源氏不陸いし今平家不討て其恩厚し流人  
 と誓ふり此人の後楮して謀叛するさと洩聞へ一家の滅亡  
 ありとて若君を害し佐殿と夫つんと伊東が二男九郎祐清  
 密ふ告て曰又入道かくの企あり君死しるる難源家  
 と回復せん今後早く北條不遣きて事を計りまはと佐殿祐  
 清小其恩を謝し藤九郎盛長と供めて北條時政の敵不  
 至りあくの由と告て頼りまは時政領養して子息宗時  
 義時等と共傳きなる時政則息女政子の方を佐殿の簾

中となりしむかくて治承四年庚子五月從三位頼政卿源氏の日  
 衰へゆふ歎き憤り三條の宮と勸りなり緒國の源氏と糶合せ  
 平家と亡さんとて故六條の判官の末子紀州の新宮の十郎茂盛を以  
 先佐殿小令旨とあり其外近江大和攝津尾張美濃甲斐信濃  
 上野下野等の源氏を催促して不日小京都へ攻り上らんとす  
 茂盛の産忽より緋露見し頼政一族と共小宮を供奉し南  
 都の方へ去り時平家の追ひ知盛維盛以下二万餘騎宇治の辺  
 追付合戦小及の戦政入道子息仲細兼細仲宗と始足利判官代  
 茂房小付死し宮中も光明山ゆて流矢の為小落命ありされは序不  
 鉦國の源氏を悉く亡きま旨平家の中其計策頻也此小三善康信  
 并康清と保皇不わけて今告げやま今黙止むふあふこと  
 藤九郎盛長小仲太光家と使して累代の内家人を召呼り當國の

目代山木判官兼隆の平家の一族也。武小先兼隆と誅戮せんとて同年八月十七日山木が敵と龍参りて兼隆と付る然る小相摸國の住人大庭三郎景親武藏相摸の傍と催りて佐殿とけん。とて佐殿の三浦の面々と待り多とも遅参ゆき北條佐々木岡崎土肥土屋加藤仁田天野狩野宇佐美等以下総小三百餘騎と率りて相及石橋山小亦出り小敵がも大庭戻野浪谷河村糟屋海老名曾我山内梶原長尾熊谷と始りて平家被官の輩三千餘騎同トく石橋山小押出りて合戦と是同夜二日の夜軍也。源氏小勢の事なる悉く亦負て佐殿の後七騎めて土肥の杖山小陽さのり大庭戻野杖山と名養て搜り求む佐殿の佐木の杖山小陽さのり大庭戻野杖山平三景時助け糸とさより土肥二郎実平のり討ひゆて真勢が崎より舟小りて安房國へ渡りしり小安西三郎景益一番小内保方小中わり房州総て内小属と

上総へ越えりて千葉介父子上総守等一族と具して陣小す。下総と陣して武蔵小入りて秩父河越江戸葛西の者とも招りる小馳急勢ひ強大小なりて相摸の國小亦入鎌倉小御所と造營て武威関東よ振ひ風の草と靡す。とて平家是と聞て惟盛忠度知度等小救万騎と授けて東國小下と佐殿も二十万騎と從へて駿州小赴き富士川と流りて對陣と武田太郎信義が謀めて敵の後と鎧小より富士沼の水鳥の一度小り羽音と響き大將士率狼狽と一戦あも及をぎと迹上る佐殿戦ひして大和と得又常陸の佐竹が從へるを攻て是と降とま小故帶刀先生美賢の子息木曾冠者美仲も宮の令旨とありて美兵と奉信ひありて出所々の合戦小務利とて北國と打從へ都へ攻上る平家も是小周章とて安徳帝と取り一門残らざりて都を落りて西國へ渡り又梶原一の谷小要害と



構えて都を窺ひ、美仲の平家を追下し、洛中を縦横し、征夷將  
軍と申す。故三條の宮の御子と帝位を即ちせんと欲す。法皇  
勅許なきを恨み、悪き行跡あり。依願し、美仲追討の  
院宣せり。これに因り、範頼、美経と兩大將として、宇治、葛田にて  
美仲と戦ひ討取て、あつちの谷を突向し、平家源氏攻落せ、續て  
四國中國の合戦、平氏利と失ひ、竟し長門國赤間を圍み、其の  
宗盛父子を虜め、一門と亡し、多幸の誓懐と一度不用し、法皇  
佐殿を日本總追捕使、征夷大將軍とほり、是より國守の外、守護  
と立領とのゆゑ、地政を定て、武士の皆、内家人とみ、自ら武將の棟  
梁と成り、治承元年より、正治元年、治世元年、治元元年、己未、正月、三日  
薨る。治承五十二年。

○征夷大將軍從二位行左近衛中將兼左衛門督賴家卿へ賴朝々の  
嫡子ゆめ、從二位政子ゆめ、壽永元年壬寅八月二日誕生、幼名、萬壽君と  
申す。建仁二年壬戌、二代將軍と成り、是より、酒色に溺れ、政事  
をなすを怠り、安達、弥九郎景盛が妾と畜し、或は阿使の小人と  
愛して、武將の機嫌を失ひ、同三年癸亥八月、病弱より、ゆめ一幡  
君へ、東元八ヶ國の内、身實、賴君ゆめ、西二十八ヶ國と附たり、剃髮、盤居  
たり。其の後、一幡君の外祖比企判友能負、一幡君が將軍ゆめ、  
系をせん、謀る小事を覺て、若君と共、北條を殺さる。けし、賴家  
卿へ、伊豆の修善寺に在ると、北條美時密に、實朝の命と偽弑せり。  
正治元年己未、元久元年甲子と治世元年丙午、治承元年  
○征夷大將軍右大臣正二位兼行左近衛大將軍實朝へ、賴朝卿の三男  
ゆめ、政子のゆめ、建久二年辛亥誕生、幼名、千幡君、元久元年甲子、政子の  
ゆめの計を以て、三代將軍と成り、治承十四年、幼稚をば、母君政子、簾を垂て

政事を聞きとるに軍とのいけ君成長の後も政事へ一向の美時の  
 討ひ申す中へ優美と好む和歌小執心源く名哥殺多あり官位へ  
 又兄小紙多し武威又盛んなり兼久元年巳卯四月廿七日の夜  
 大臣拜賀の爲雀ヶ岡へ社参の節頼家々の三男と若君傍小成て  
 阿闍梨公曉と申すを雀ヶ岡の別當小なり兼久元年巳卯  
 等又君の敵へ実朝公也とよく申す所藏也此夜の闇に幸ひ  
 小社への形小出立実朝公の御首と申す雪の下の方へ迎ひ  
 長尾新六定景公曉と申す討えぬ建仁三年癸亥より兼久元年巳卯  
 まで治世十七年申歲九八  
 以上と三代將軍といふ文治二年より兼久元年と父子二世合て  
 三十二年也

此の巻の初めは...  
 四年八月...  
 兼久元年...  
 父子二世合て...  
 三十二年也

御連枝蒲殿

左馬頭義朝八男

源範頼 参河守

範國 吉見二郎

為頼 同小二郎

尊範 若宮別當

殿の宿所の床のつらふを  
酉流の後害す



参河守範頼

参河

範頼の初より遠く在頼朝の孫余の孫  
追手の大将の命と當り舎弟義経と共  
西國小競を中興九列して合戦  
平家亡びて後参河の國を治り建久  
四年八月謀殺の咎えありと云  
ゆふ記精文として異かたの事  
多しと評容かく家臣當麻太郎孫余  
伊豆の事と云ふ事とも十披きと云う伊豆

益

同 判官殿

左馬頭義朝十男

源義經 伊豫守左門尉  
檢非違使

女子 伊豆右門尉有樞堂

女子 早世



伊豫守義經

平治の乱小美朝長田忠致が為小討きのいし討  
常盤三人の息令若し若牛若と共平家小  
捕りて小清盛入道老盤が容色小愛て寵  
すふり其心を取らんと三子を助けて出家  
あつむ牛若の伯父回忍鞍馬の一和尚あり  
復讐を心小忘さざりて兵学小精んを令せて  
金高橋二小従の奥及下上秀衡小身とあせ頼朝や兵の討渡  
かあつて中陣小あつて平家追討小橋手の大將と木曾義仲と栗津小  
亡一其余一の谷八幡橋浦所々の軍小奇計とあつて大功少くも  
頼朝の旨小違ひ漂泊と奥及下上高敏ふて恭衡が自書と

同 阿野殿

左馬頭義朝十男

全成 阿野法橋  
醍醐惡禪師

時元 阿野冠者

公佐 右馬権頭



阿野法橋全成

推名を令若とり常盤腹の長子之  
平治の乱小兄牙三人平家小とつて  
南都あて出家一頼朝や石橋山の軍  
敗色一とと山中とあつて其の存生紙  
知て後小鎌倉小あり仕て所依と  
あつて其の後小別勇也建仁三年五月  
十九日謀叛の同えあつて御所小  
あつて武田五郎信光と共瓜生捕りて  
常陸の國人配流す其後八田右衛門尉知家頼朝の命と  
うけあつて下野國小て害と

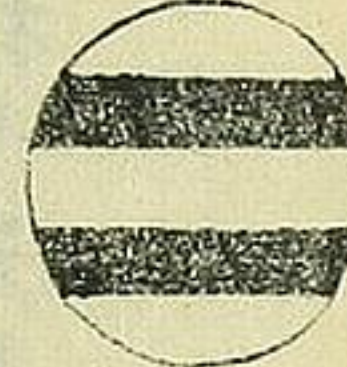


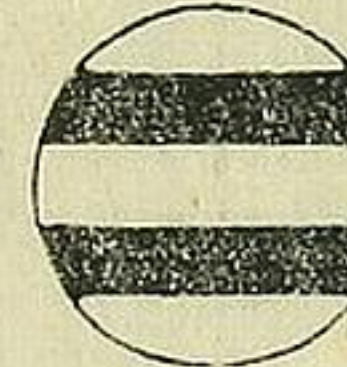
義基	里見太郎
義細	大島藏人
時成	鳥山三郎
義直	里見判官代
義行	里見五郎

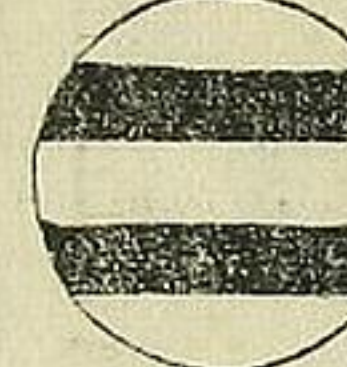
跡よりて頼朝々の所方不為る戦功多し  
 多し子息み人り色も武勇の人なり  
 天福元年十一月廿八日行年七十八歳  
 卒を子孫承る

同 新田家

大炊助義重五男	源經義	額田五郎
氏經	同二郎	
正氏	同七郎	
經氏	同二郎	
時細	同三郎	
義重六男	源義光	新田冠者
義重七男	源義佐	新田小四郎


 額田五郎經義  
 上野


 新田冠者義光  
 上野


 新田小四郎義佐  
 上野

各舎兄茂兼不志とがひ戦功多し

同 足利殿

陸奥守義家三男式部大輔  
義國三男

源義康 足利陸奥新判官  
内昇殿

義房 足利判官 於宇治討死

義清 足利判官 於水島討死

義兼 足利上総介

義純 畠山遠江守

義氏 足利左馬頭  
正五位下

義實 足利右馬頭  
從四位下

廣沢判官代

畠山 足利家

上総介義兼長子

源義純 畠山遠江守

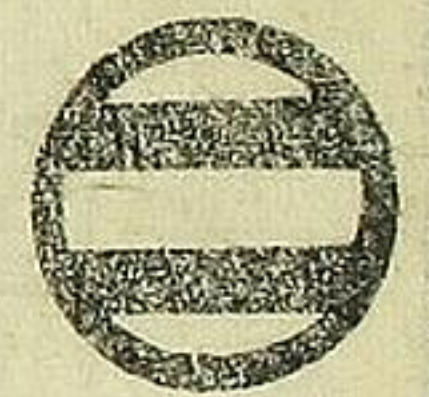
泰國 畠山三郎上総介

仁木 同

判官代義實長子

源實國 仁木太郎

義俊 同又太郎



足利上総介義兼  
下野

頼朝々々義家のとより一族と共味方不  
すわり平家追討のときら範程の多不  
屬して西國へを我功あり於朝々も  
内一門の中あも別して重んじらひて  
北條時政の智とより是より威自ら  
高く家門次第不却東昌と新波細川  
仁木畠山荒川今川吉良淡川石堂一色  
桃井岩松等の祖也



畠山遠江守義純  
武藏

義純の又義兼秩父重忠が後家を娶  
て義純を生む孫念の命ふりて畠山の  
家と稱せ秩父をのりて足利の祖也



仁木太郎實國  
参河

一族の棟梁たるは足利義兼不從ひて  
その子孫終る足利の披及とより高名  
の家たり

細川 同

判官代義實三男

源義季 細川二郎

義久 細川又三郎

家俊 上地七郎

俊氏 細川八郎

荒川 同

判官代義實三男

源義宗 戸賀崎三郎  
号荒川

満氏 荒川二郎

御門葉 武田家

伊豫守頼義三男新羅  
三郎義光二男

源義清 武田冠者刑部三郎

清光 逸見黒源太

光長 逸見上総介

信義 武田太郎

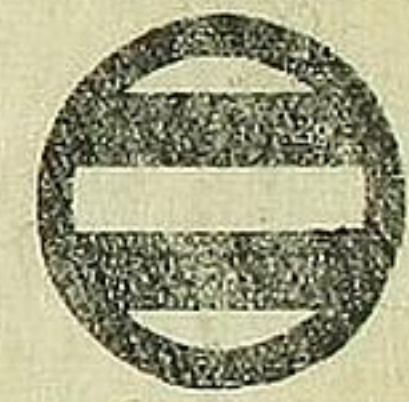
遠光 加賀美二郎信濃守

義定 安田二郎遠江守

清隆 安井四郎

長義 河内五郎

光義 田井六郎



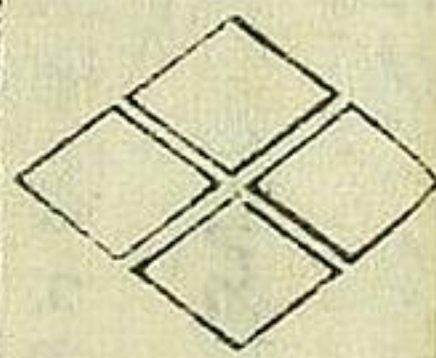
細川二郎義季  
参河

仁木とあるは義季又武勇の人也子孫  
管領家となる



荒川三郎義宗  
武藏

仁本細川と同く義季小属して戦功  
すくまらざる



逸見上総介光長  
甲斐

光長と信義の同胞ゆへ同日小誕生を  
世より一亭生あり光長の己の刻亦生  
信義の午の刻亦生るよりて光長を以  
熱心とて頼朝を義季のそとあり  
味方小系り富士の根方あり大庭股  
野等と戦ひ其功多し孫のち系惟  
義の義久の刻小鎌倉の苗とあり  
其賞とて新成の事とあり武門  
極宗昌と



巖尊

曾根禪師

基義

逸見判官

惟義

逸見太郎

義行

奈古藏人

義長

深津三郎

久義

同三郎

義遠

浅利与一

義俊

判官代

義信

同四郎

信清

八代餘冠者

保義

逸見五郎

同

同

逸見清光二男

武田太郎信義

武田太郎信義

源信義

武田太郎

駿河

忠頼

一條二郎

兼信

板垣三郎

右義

武田右兵衛尉

信光

伊沢五郎  
武田伊豆守

追討も其功被群ありとて一番小駿河國をわける後小子息忠頼の  
末ふりて蟄居も大名の中ふ双びたを大身也

一條

同

太郎信義長子

一條二郎忠頼

源忠頼

一條二郎

行忠

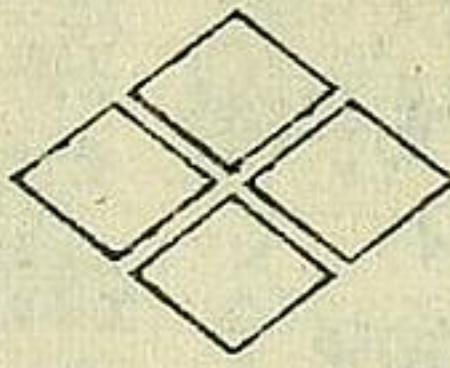
甲斐

行義

東條二郎

頼安

上條三郎



一條二郎忠頼

又信義と同く、信々の合我小平柄彦  
志る小庄一門といひ大身といひ人是を  
室んトなるまの威勢を振ふのあり  
叛逆の因えあるふより元暦元年六月  
十六日嘗中ふあひて討つるべき上肯工藤  
祐経小傘をさする社經猶後するふより  
天野遠景別の信を奉令して忠頼を  
誅す

板垣 同

太郎信義三男  
源兼信 板垣三郎

板垣三郎兼信  
甲斐  
又小者として戦場不慮に軍功あり平家追討の時西園より使をぬきまゝ一門の列をよび土肥実平がよみたる軍率の難敵をかつんと乞ふ朝々の後小

頼時 同四郎  
頼重 同六郎

実平の我が眼代あり其行いと兼て知るゆゑ不遣を安んずる是大任の一門即従の差別あはるる兼信一門の威ふちりて不遜とすべし彼が才器いんぞ実平小乃らん兼信がととる戦場ふ向いて命を捨らばるるの事あり

此のゆゑ不遣を安んずる是大任の一門即従の差別あはるる兼信一門の威ふちりて不遜とすべし彼が才器いんぞ実平小乃らん兼信がととる戦場ふ向いて命を捨らばるるの事あり

武田 同

太郎信義三男

源有義 武田右兵衛尉

武田右兵衛尉有義  
甲斐  
武勇の人あり梶原景時と親しり

有信 吉田太郎  
信盛 武田為太郎

武勇の人あり梶原景時と親しり  
くまへ景時蝨居のとき有義やみきて武將とせんと巧しう成りて各是有義逐電とす

武田 同

太郎信義四男

源信光 武田大膳大夫  
伊次五郎

武田大膳大夫信光  
甲斐安藝  
始に伊次五郎と号し智三男兄弟あり能えて武功多し朝々の内をえりて一家の棟梁とす

朝信 武田太郎  
信忠 同悪太郎

能えて武功多し朝々の内をえりて一家の棟梁とす  
後小甲斐國と

同悪太郎

信政 武田伊豆守

信長 一條六郎

信隆 岩崎七郎

信繼 石橋八郎

加賀美

同

逸見清光三男

源遠光 加賀美二郎

光朝 秋山太郎

長清 小笠原左京大夫 正四位下

光行 南部三郎

經行 於曾四郎

秋山 同

信濃守遠光長子

源光朝 秋山太郎

光定 同小太郎

小笠原

同

信濃守遠光二男

源長清 小笠原左京大夫 正四位下信濃守

長經 小笠原彈正少弼

長光 八代四郎

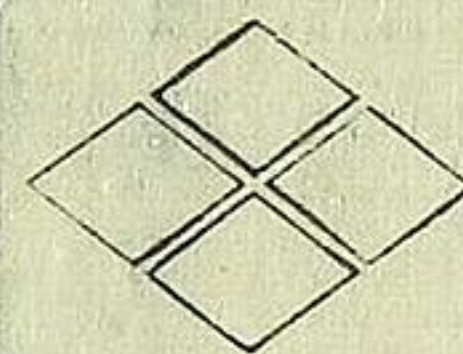
時長 伴野兵部少輔

兼會武監

又安藤の守護とある子孫日と  
進んで盛んあり

信基 馬淵九郎

光信 武田十郎



加賀美信濃守遠光

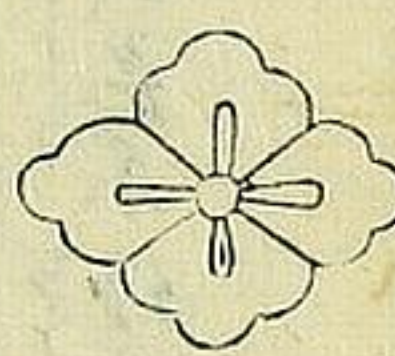
武勇技群めて弓馬の達人あり武の

合戦小共功多し子孫繁昌を秋山小笠

系南部於曾八代伴野大井茂清海大倉

高畠下條田村上降一宮益田九毛山中津毛

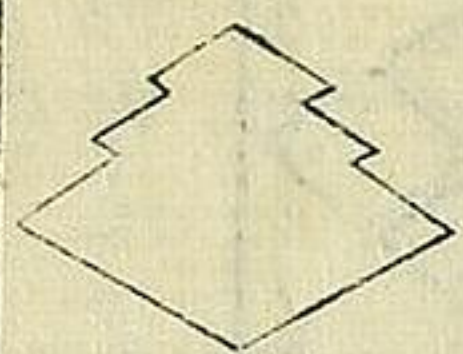
常盤中川等の祖あり



秋山太郎光朝

甲斐

又遠光小共の功にて戦功ありけし孫ハ  
武田の被官とある



小笠原左京大夫長清

信濃阿波

長清京都ありて佐殿の長兵衛

老ぬの病とありて東國へ馳下り駿河

黄瀬川の陣ありて於朝々ふとめて

紹と武勇他小とえてたのびる

金一ノ三ノ金

朝光	大井太郎
行長	藤崎十郎
清時	鳴海金十郎
清隆	大藏三郎
長隆	大倉与一郎
行信	同 又三郎

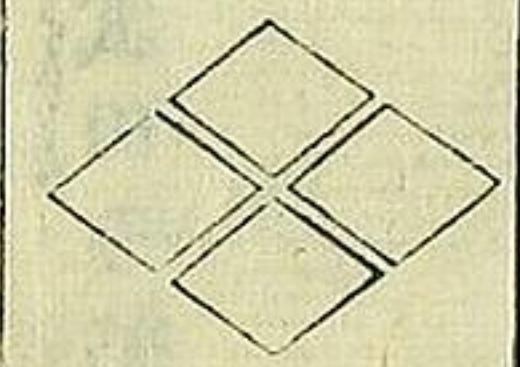
南部 同

信濃守遠光三男

源光行 南部信濃三郎

實光 同三郎

弓馬の達人なり子孫繁栄すて代々  
名の人あり



南部信濃三郎光行  
信濃

又と共小所くの軍小戦功あり其子孫  
奥忍小領して武名き

安田 同

逸見清光四男

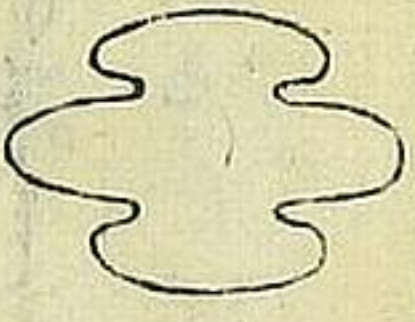
源義定 安田三郎 遠江守

義資 安田越後守

義秀 同二郎

忠義 志磨四郎

貞長 逸見孫四郎



安田遠江守義定  
遠江

物朝々義定の始より一族とあり  
軍忠と号し本号或の平家との合戦  
小名名数多かりしゆり遠江の國も  
小姓ト嫡子義資ハ越後守と成るハ一門  
の中小も忍びるる大名なりしが義資始  
か長中て正朝の女房小籠虫とありしを握  
系景季が妻小知と色縁者故小知のえ不與  
と紫那り加茂景藤小命せられて室口せ  
よりて義定縁聚の企ありて建久四年ハ  
月十九日縁せし時小籠虫の平一

庚子年

安井 同

逸見清光五男

源清隆 安井四郎

隆義 秋山四郎太郎

隆頼 二宮二郎

河内 同

逸見清光六男

源長義 河内五郎

清光七男

源光義 田井五郎

曾禰 同

逸見清光八男

嚴尊 曾禰禪師

遠頼 同太郎

長資 同二郎

朝資 同五郎

奈古 同

逸見清光九男

源義行 奈古藏人

行信 同三郎

義經 同六郎



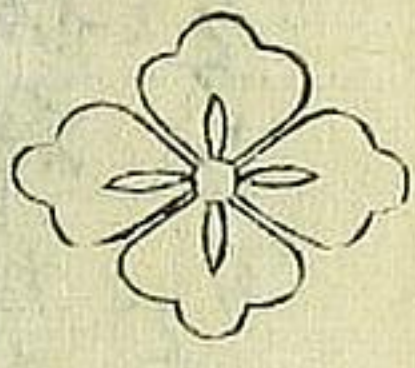
安井四郎清隆

父小基の御子にて戦功ありけ子孫二宮と稱す



河内五郎長義

武勇の人あり平家亡びて後對馬の守護とありて異國の防禦を命ぜらる



曾禰禪師嚴尊

初より出家すとて武門を忘れず一族と共小澤倉屋の庄味方あり戦功あり



奈古藏人義行

父兄ふちとて戦功あり

淺利 同

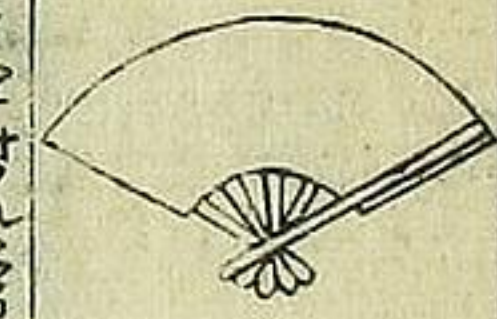
逸見清光十男

源義遠 淺利与一

知義 同六郎

清光十一男

源信清 八代餘一冠者



淺利與一義遠 甲斐

義遠戦功救済あり建仁元年城督盛  
越後の國中て叛逆の時討ちの大將  
佐々木盛綱小志こころ武勇を殺し  
資益が伯母板額女勇力く不撓色  
精兵の強弓之味も是か為小惱まじ  
と藤沢清親板額がた右の眼を射  
て是を擲くまじ義遠板額が武勇  
拔群たろふおとてお家々ふ  
とひはけし妻とまして中園小治る

御門葉佐竹家

新羅三郎義光嫡子

源義業 進士判官代

昌義 佐竹信濃守

義定 山本遠江守

義仲 式部丞

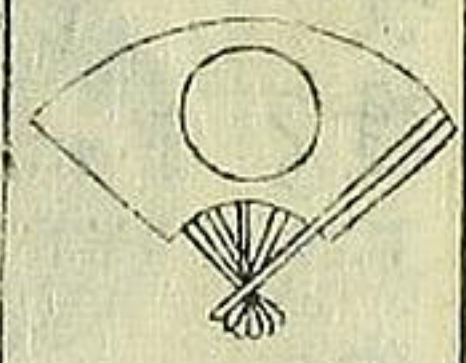
源尊 法師

忠義 佐竹太郎

義弘 同藏人

義宗 同三郎

隆義 同常陸介



佐竹別當秀義 常陸

父隆義常陸守位して大身也秀義ハ  
兄義政と云ふ自立の意あるがゆゑふ  
操余ふ糸くも後て大軍をのりて  
佐竹を討つと縁女廣常義政を  
助けて害を秀義ハ又金砂の飯小  
義ア一紙廣常計を以て及り居る  
秀義は成るくくくく奥に遠る  
其後頼朝々々ささかひ始て受法  
國山田の々の地隠蔵とある秘あり  
同叙紙ありり子孫絶業を

義季 佐竹藏人  
親義 田田冠者  
昌成 佐竹冠者

義政 佐竹太郎  
秀義 佐竹別當  
義茂 同左衛門尉  
助義 同八郎  
義清 稻毛九郎

同 山本家

判官代義業二男  
源義定 山本遠江守

義經 山本若狭守  
光祐 同二郎伊賀守

義兼 柏木判官代  
義春 早水判官代  
胤義 豊後冠者  
宣義 真島冠者

宣慈 同太郎

義澄 山本又二郎

頼經 同右近將監  
頼直 同左近將監

義良 佐竹判官代  
宗信 同勾當六郎

義繁 佐竹別當  
秀繁 常陸介  
義資 同左衛門尉  
公清 同八郎三郎  
同八郎三郎 於宇治討死  
上智四郎



山本若狭守義經

近江 義經其弟義兼と其弟小於朝々小公

を其弟小於朝々の平家朝々の知書を將と  
して邊に攻む義經の戦いとも  
責は彼軍にて藤倉の道に在る  
一族多く存人行家不徳の事徳の  
國にて平家朝々と戦ひ初あらずして  
付死するもの多し

義明 箕浦冠者  
義弘 山本左衛門尉  
義高 錦織冠者  
義成 大島冠者  
頼高 河内冠者

同 平賀家

新羅三郎義光三男

源盛義 平賀刑部四郎 左兵衛尉

有義 同二郎

安義 佐々毛三郎

義信 武藏守

惟義 大内右衛尉

敦義 大耳二郎

資義 金澤小二郎

有資 平賀右兵衛尉 同七郎

同 同

武藏守義信嫡子

源朝政 右衛門尉武藏守

朝經 平賀四郎三郎

朝村 同飛驒守

義信二男

源朝信 平賀三郎 号小野

時頼 小野藏人

義信三男

源遠平 小早川右兵衛尉



平賀武藏守義信 武藏

平治の合戦の義朝は志す所の武勇  
とありしに又於朝々義を奉ると  
安國を以て下りて志す所の戦  
軍功多し而も家門の隆一とありて  
京師の守護職を命ぜりし武藏  
守とありしに其後温明にして國務の  
事成敗其の如くしきゆ叶ひたる  
於朝々中威のありし國務の事其後  
義信の如く執事へて上政所  
出知りしに道と違阿とあり



平賀右衛門尉朝政 武藏

朝政は北條財政の後妻牧の如く  
息女と室ししに其威ありしに  
あくその威の如くししに  
忠が嫡子の希重保く口論し  
姑牧の如く先重保を後して  
殺し又重忠を後して其後威あり  
おのち家系を武將とありしに  
企てて復あつて其威ありしに  
害ありし



大内 同

平賀盛義四男

源惟義 大内相摸守 駿河守

惟信 左衛門大夫

惟親 左衛門尉

家信 大内藏人

義海 木津律師

義行 小野太郎

惟時 大内木工助

惟忠 左衛門尉

惟基 帶刀長

御門葉 石河

義家六男

源義經 右兵衛尉 伊賀守

義基 石川武藏守

義資 同判官代

義廣 錦織冠者

義兼 石川判官



大内相摸守惟義 信濃

兄義信とて小孫舎ふまりて中国西  
海の軍小義経の属し戦功ありしより  
右衛門尉の位に任ぜり又駿河守とあり  
是の族伊賀守のち後藏人補せり  
頼朝々の中是地小異のより信濃の  
居候とて息家信へ姪の朝政ふは  
系はるゝあつて自害すとてりども  
其餘の男子官忠を以てり孫連  
録と



石川判官代義資 河内

義資高倉の宮の令前を蒙り一族と  
共は得て平氏を討んとて頼朝を東  
國へ義兵を率ふるに及んで義資も  
本國河内にて旗をよぐ依て平氏を  
知登とて將とて之を向けたり義  
義基義廣の討死しそもも擧と  
あるとてりども死をのがして孫舎ふ  
下り頼朝をふまるとて河内源の  
一とありし孫孫家と

同 毛利

義家七男 陸奥六郎 源義隆

頼隆 毛利藏人大夫 号西阿

光廣 同右兵衛大夫

親光 同左近藏人

經光 同藏人

吉祥丸

あり孫不憐と云く百て  
春村が尊と云く百て  
八人一筋不自也

御門葉 太田

攝津守頼光四代從四位下  
兵庫頭仲政嫡子

源頼政 從三位 兵庫頭  
号頼圓 七十六

仲細 正五位下 伊豆守

兼細 大夫判官

廣細 太田駿河守

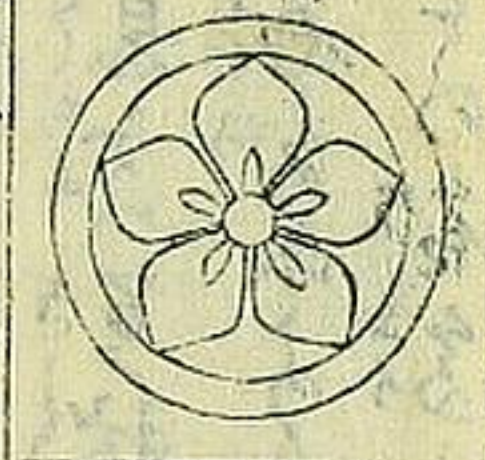
女子 二條院讚岐

右細 伊豆右衛門尉



相模 毛利藏人頼隆

父義隆平治の乱に義朝を從ひ軍駈きて  
義朝と闘ひて義朝を討ち死せしむる時比叡山に於て  
討死せしむる時頼隆は生れて又十餘日也されども  
男子たるが下流の國に流るる頼朝を房及  
より下流へ至りて其時子葉常胤具して  
始て又常胤の色を中を頼朝に感  
ずりて常胤が存す不居じりて對面  
ありて常胤が存す不居じりて對面  
恩遇渙く其後之浦尾使  
元年六月春村が謀殺す



太田駿河守廣細  
駿河

頼政の後ひそく不本國下を頼朝へ  
考ごひ武功數多あり是よりて駿  
河守に任ぜられ孫兼廣の由  
りしが建久元年十二月頼朝々上洛の  
時由信不候に内爲國の召逐電を  
是を以て後醍醐入て出家すと妹  
ハ二條院ふけて後醍醐と名  
仲の石の後醍醐と稱するはけ人  
頼政仲徳の身不名譽あり

同 大河内

頼政二男

源兼細 大夫判官 檢非違使

顯細 大河内源太



大河内源太顯細  
尾張

同 小國

兵庫頭仲政二男

源頼行 小國藏人右馬頭 丹後守

正細 同右馬頭

女子 宜秋門院丹後

宗頼 桃園右兵衛大夫



小國丹後守頼行  
越後

同 深栖

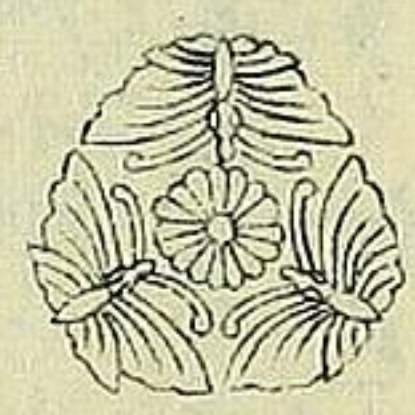
仲政三男

源光重 深栖陵助

重清 松崎二郎

頼重 堀三郎

仲重 深栖藏人



深栖陵助光重  
上野

光重の武勇の事ふあつたに  
人々の交経奥に下向のとき  
三條の橋二をたててつるへり  
子息は頼朝々ふはてて武功あり

御門葉 多田

摂津守頼光六代嫡流

源頼盛 多田摂津守

行細 同藏人



豊島藏人高頼  
攝津

足頼盛源氏の嫡流として代々攝津守  
小信も是を多田院の源氏と稱す

朝實

多田判官代

高頼

豊島藏人

頼基

野瀬三郎  
多田太郎

資國

能瀬藏人  
豊後守

御門葉山田

經基王二男武藏守滿政六代

源重遠

浦野四郎信濃守

重直

山田先生河邊冠者

重頼

葦敷二郎

重房

小河三郎

重光

山田又太郎

重季

同小二郎

重清

小川又一郎  
左衛尉美濃討死

重助

生津太郎

重高

葦敷二郎

重義

同三郎美濃討死

重信

同四郎討死

御同流片桐

經基王五男下野守滿快六代  
二郎大夫爲細男

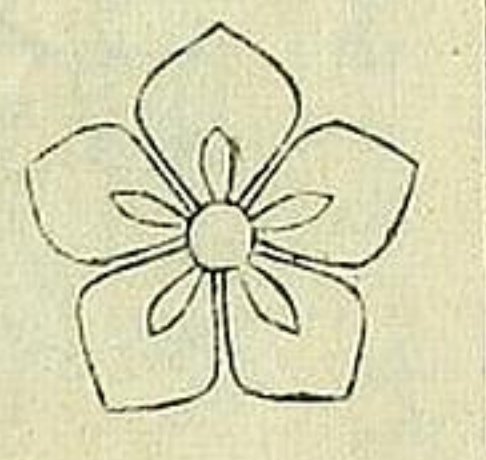
源景重

片桐小八郎大夫

爲安

同太郎

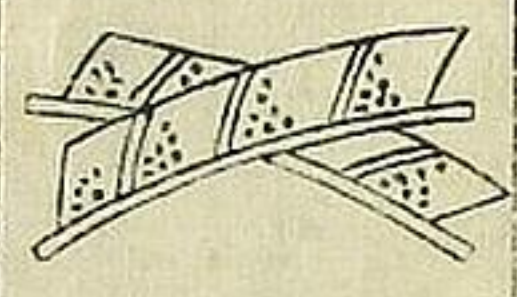
嫡子仍繼ハ新大納言成親の標及ありて  
麻が谷の命合瓜はしき登入道入道思ひ  
人ありの言報ハ頼朝々々後ハ美濃都  
爲て西國之報んとせし討死頼基と共  
兵谷出で遮りし討死し



山田大和守重弘

又重遠ハ家朝臣の聲あり尾張國浦  
野小治と重弘始爲人行家不屬  
重弘服して平家と戦ひ彼軍一族  
多く討死し其の報朝々々後ハ美濃都

- 重満 山田太郎 伊達冠者 重義 泉太郎
- 重親 同彦五郎 美濃討死 承聖 山徒少僧都
- 重家 越後二郎 同断 重朝 抱合冠者
- 重義 白川四郎 鏡冠者 重廣 同二郎
- 重信 越後五郎 美濃討死 重俊 小島太郎
- 重長 足助左衛尉 重秀 同六郎



片桐太郎爲安

又景重平治の合戦ハ長朝ハ志々  
武勇とありしとき岩間飯島もけ同流  
爲安も又武功あり

同 二柳

滿快六代村上源木國高男

源國忠 二柳三郎大夫

國平 夏目左近將監

同 成田

滿仲二男大和守頼親五代

石川三郎基光男 澤田太郎

源光義 成田二郎

同 土方

頼親七代宇野三郎義治男

源季治 土方太郎

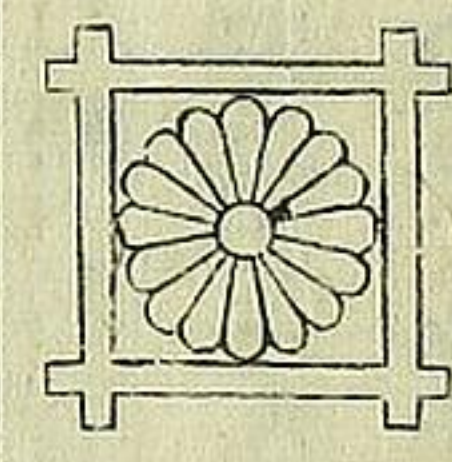
同 大森

宇野義治男

源茂治 大森三郎

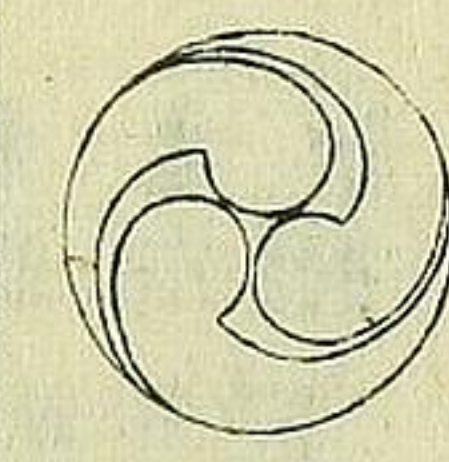
治負 同三郎

頼行 宇川四郎



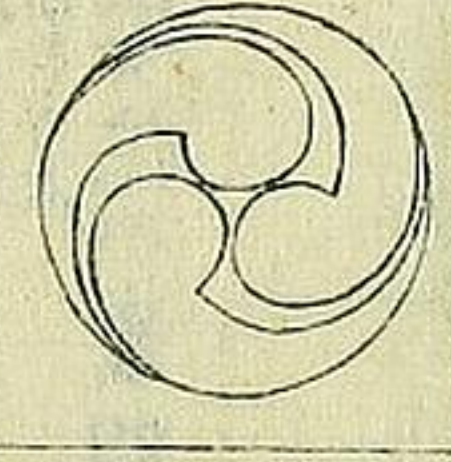
二柳三郎大夫國忠 信濃

於朝々ふはて信濃夏目の郷の地取職と  
まのり是より夏目と号す又武勇の人と



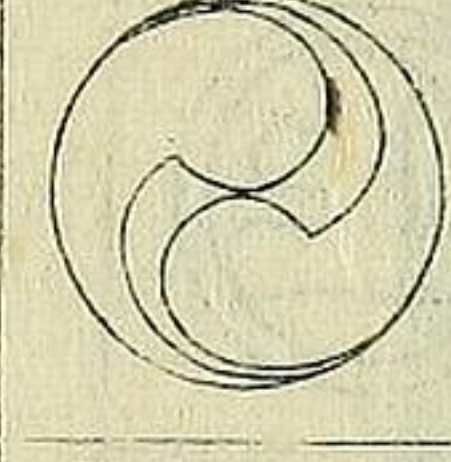
成田二郎光治 大和

於朝々ふはて功あり後小美濃國市  
橋の左の地取職とまのり是より又濃  
信



土方太郎季治 大和

於朝々ふはて武功あり



大森三郎茂治 大和

祖又親治大和守宇野小徑して是より  
宇野の稱を後保元の合戦小徑の  
一條の爲又と共小室徳院の内條と  
さのり平の基盛と戦ひ生捕きて後赦  
免せしむる茂治の於朝々ふはて

同 村上

河内守頼信三男肥後守頼清

三代村上判官代爲國男 村上右馬允

源經業

頼時 同左衛門尉

同 同

頼清三代顯清男

源仲清 村上三判官

親清 村上千田藏人

清時 千田修理亮

同 井上

河内守頼信三男乙葉掃部助

頼季五代桑洞五郎清長男

源忠長 井上太郎

長直 同太郎

經長 同二郎

光朝 同三郎

同 高梨

頼季五代

源頼高 高梨判官

頼平 同小太郎



村上左衛門尉頼時

頼朝々の愛臣也奥羽征伐等不戦功あり



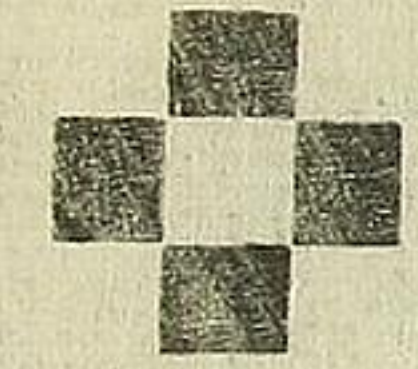
村上三判官仲清

頼時の一族あり頼朝々不仕し仲清の見安信ハ度四郎美光が祖也



井上太郎忠長

代々信濃國不仕く武勇の因えあり



高梨判官頼高

始々本号及義多の時より終りて由也

義高 関山五郎

同 仁科

頼季五代

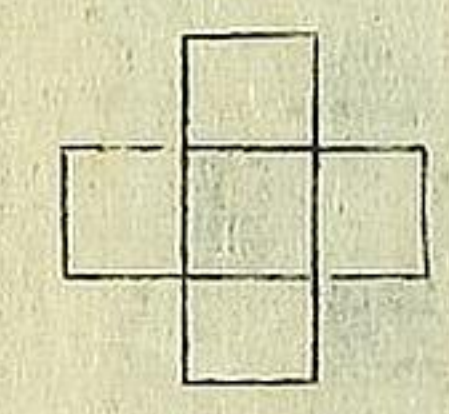
源盛宗

盛朝 仁科二郎

仁科太郎

鎌倉正金

平の戦ひは功をたつてしよる後さび  
て後後會後ふけつて軍功あり



仁科二郎盛朝  
信濃

又盛宗のよる及小後ひて我功あり  
登朝の豫會及ふけつて頼季のよる  
けりあも末持小坂窪順田安本田  
依るる号々一族教多あり

問註所

公事奉行

別當	大膳大夫大江廣元	侍所別當	和田左五門尉美盛
令	二階堂主計允行政	所司別當	梶原平三景時
宗主	鐵田新藤二俊長	寺社雜事	右京進 季時
知家事	岩平小中太光家	京都守護	右兵衛督能保卿
執事	中宮大夫蜀三善康信	鎮西奉行	天野藤内遠景
	掃部頭親能	和田親原	大友左近將監能直
	筑後權守俊兼	故障の時ハ	
	隼人佑康清	實朝公侍所	
	文章生宣衡	別當	北條式部太輔泰時
	民部丞盛時	御家人奉行	二階堂山城判官行時
	左京進仲業	同	三浦左門尉美村
	左前介實俊	御出已下御所中	江判官能範
		御家人供奉野役	伊賀右兵衛尉光宗
		已下催促	

